毎日歌壇

米川千嘉子 選

臘梅を見つむる病夫の傍らで一人の明日のわが身恐れき　坂戸市　納谷香代子

〈評〉病重い夫の絶望のとなりで、作者はそう遠くない日に取り残される予感におびえていた。辛いロウバイの記憶だ。

雪だるまゆっくり横にするように布団に入り疲れをとかす　仙台市　石川　初子

〈評〉疲れで全身コチコチに冷たく固まったよう。ユーモラスで、そしてリアル。

鬱の日のわたしのディープ・ブルーには太古の海の記憶もあろう　枚方市　坊　真由美

紙雛を飾りて祝ひ膳独り食む九十七歳の上巳の節句　八千代市　一戸　光代

陥没の事故さえ知らず　合格を目指す息子の飯を用意す　さいたま市　神垣　祐子

「彼氏ほしい」「彼女ほしい」と人は言う誰かを好きにもなってないのに　国立市　佐藤　建

幼子を詠む歌かなし切切とわが子のやうに心配深し　幸手市　中村　早苗

戦いは外つ国のことと信じてる一億人の頭上に幸あれ　東　京　青木　公正

足取りは今いちだけどまだわれもドリンクバーまで何度も行きぬ　白井市　毘舎利道弘

さあ春だ　コロナ禍を思へば「さあ」といふ一語のなんとうれしきものかな　春日市　林田　久子

水原　紫苑 選

にんげんと百合のひかりの含量が等しくなった　すべては過ぎて　大津市　世田　夏雪

〈評〉「にんげんと百合」のひかりの含量が等しくなった時、すべては過ぎて、私たちはどこへゆくのか。天国か地獄か。ユリはきっと知っている。

でも兄は積み木の城の門衛も殺せぬひとで、ひとだったはず　東　京　境　千尋

〈評〉積み木の城の門衛とは誰だろう。でも、結局は殺してしまったのか、兄よ。

死者からの手紙は届き枯野には雨の匂いが満ち満ちてゆく　さいたま市　雨谷　詩穂

半世紀かけてわたしが折鶴のお腹の中に閉じ込めたもの　長岡市　三月　とあ

ノイズだと思っていたら風の音もしくは崩れる氷山の音　札幌市　橘　晃弘

でこぽんの皮をむきをり永久にこゑのとどかぬ星の地を剝ぐごとく　武蔵野市　八田　絵砂

シャワーから生まれてきたと言いながら光の膜を破っていくの　岡山市　松井　度

春の雨は「ありをりはべりいまそかり、ありをりはべりいまそかり」と降る　雲南市　熱田　俊月

悄々と夜を明かした窓際に小鳥のうたは近くて遠い　熊本市　中島　遊静

雪だとは知りつつ口に含んだら世界の終わる音がきこえた　松原市　たろりずむ

伊藤　一彦 選

小さな町が大きな家だった昭和　空気のような絆があった　宝塚市　藤田　晋一

〈評〉今の若い世代には理解しがたいだろうか。昭和のある時期までは確かに「小さな町が大きな家だった」。昭和世代の私はうなずく。

学校に行くより大切なことを親子で拾い集めて生きる　奈良市　久保　祐子

〈評〉最も大切なのは親子の間の信頼関係に違いない。そのことを知り尽くしている作者の歌。

ぎんいろの庭をあなたに見せるため椅子は背筋をただしはじめる　那覇市　奥村　真帆

振り向かず受験会場へ入る娘の白いフードがゆっくり進む　枚方市　坊　真由美

鳥たちは主張するごと鳴き交わすつぼみふくらむ梅の枝にて　取手市　奥山いずみ

あの魯迅が愛し憂えた中国は岩波文庫に薄く残れる　東　京　野上　卓

背に腹はかえられぬ熊むかし森だった街に出て殺される　西海市　まえだいっき

九ちゃんのその後を知っているだけに昔の紅白しんみりと見る　堺　市　一條　智美

八十歳を過ぎた今では祈るだけ残る病の癌に福あれ　横浜市　中村　秀夫

冬枯れの庭に雀が三羽来て我には見えぬ草の穂を食む　周南市　浅田　純子

おことわり　歌壇選者の加藤治郎さんは都合によりお休みし、他の選者3人で選歌を行います。ご了承ください。次回は11日に掲載します。

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます